北天の星（下）

吉村昭

北天の星（下）

吉村昭

講談社

北天の星（下）

昭和五十年十二年八日　第一刷発行
昭和五十一年一月二十八日　第二刷発行

著者　吉村　昭

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二―二一
郵便番号一一二
電話　東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
振替　東京三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取りかえします。
©吉村　昭　昭和五十年　Printed in Japan
（文一）

北天の星

（下）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

八

五郎治とミテレは、ツングース人のエヘムカ老人の家にそのまま寄宿する身になった。代償として、五郎治たちは、二挺の銃のうち旧式の銃一挺を弾薬とともにエヘムカに渡した。

五郎治は、ミテレと相談し、来年春までエヘムカの家にとどまっていようと話合っていた。

しかし、左兵衛が死んでから半月後、ミテレは、エヘムカの家にくる前にいたギリヤーク人の家に移りたいと言い出した。

「コノ家ノ食物ハ少イ。ソノ上、食物ノ質モ悪イ。人間ノ食エル物デハナイ」

かれは、うんざりしたように言った。

「ソレハ、確カニソノ通リダ」

五郎治はうなずいた。

エヘムカ老人は、人間が生きられる最小限の食物しか出してくれない。食物は、三人が辛うじて来春まで食いのばす量だけしか貯蔵されていず、もしもエヘムカが食物を出すことを停止してしま

えば五郎治たちは死にさらされる。
五郎治は、ミテレと同行したかったが、雪の中を出てゆくことは危険だとも思った。
「今ハ、極寒ノ季節ダ。ワレワレニハ、寒サヲシノグ十分ナ衣服ガ無イ。ソノヨウナ状態デ、遠地ヘ行ケバ途中デ凍エ死ニスルコトニモナリ兼ネナイ。モウ少シ温暖ニナル時期マデ待ッテ、二人デギリヤーク人ノ家ヘ行コウ」
五郎治は、言った。
しかし、ミテレは承服せず、
「気温ガ上ル迄ココニイタラ、餓死シテシマウダロウ。ギリヤーク人ノ家ニ行キタイ」
と、熱心に主張した。
五郎治は、口をつぐんだ。ミテレの言葉に、それ以上反対する気にはなれなかった。今まではエヘムカの家で乏しいながらも食物を口にしてきたが、それがいつまでつづくかわからない。突然のように、食物が絶えることもあり得るのだ。
「オ前ノ思ウ通リニシタライイ」
五郎治は、答えた。
ミテレがギリヤーク人の家に移ることを知ったエヘムカ老人は、一人分の食料を出さずにすむことをひどく喜んだ。そして、箱の奥から煙草をとり出すと、ミテレにあたえたりした。
ミテレは、出発の準備をはじめ、五郎治に銃、弾丸、火打ち具を貸して欲しいと申出た。ツナカイ（トナカイ）を仕とめて食料にしたいという。
銃は貴重で、五郎治は手ばなすことをためらった。が、ギリヤーク人の家の近くにはトナカイが

多く棲息しているという話もきいたし、いずれは自分もギリヤーク人の家でミテレと合流する予定にもなっているので、ミテレの申出に応じた。

ミテレは喜び、その日の正午過ぎにギリヤーク人の家にむかって出発した。

家には、エヘムカ老人と五郎治の二人きりになった。五郎治は、エヘムカから魚の干物などを少量ずつわけてもらって食べていた。それは、辛うじて飢えをまぬがれるだけの量にすぎなかった。

かれは、日に一度は左兵衛を葬った雪穴の傍に赴き、冥福を祈って合掌していた。

ミテレがギリヤーク人の家に出発してから八日目の夕刻、一人のツングース人の男がやってきた。

かれは、ギリヤーク人の家から使いにきた者で、一つの悲報をもたらした。それは、ミテレの死であった。

前日、ギリヤーク人の家の者たちは、たまたま海岸に近い雪中で凍死しているミテレを発見した。ミテレは、家の近くまで来ながら寒気に体もこごえて倒れたのだ。

五郎治は、呆然とツングース人の顔を見つめていた。幾分予想していたことではあったが、それが現実のものになったと知ると、ミテレの死が哀れに思えた。

「ドウシマス」

ツングース人の男がたずねた。

五郎治は、当惑した。どのようにすべきか、彼は思案した。

むろん、かれは、ミテレの死を耳にしても左兵衛の死のような深い悲しみを感じてはいなかった。元気に出発していったミテレが、今では死者になっていることに驚きを感じているだけだっ、

た。
しかし、半年以上も苦しみを共にしたミテレの死を知ったかぎり、その遺体を埋葬してやらねばならぬと思った。
「遺体ハ、ドウナッテイル？」
五郎治がたずねると、若い男は、
「雪中ニ穴ヲ掘リ、埋メタ。ソノ上ヲ多クノ木デオオッタ」
と、答えた。
五郎治は安堵したが、ミテレの携行した銃のことが気がかりだった。ただ一挺の銃が失われれば、五郎治は獲物を仕とめることもできず、生活に重大な支障となる。
かれは、ツングース人の男に、
「ミテレハ、銃ヲ持ッテイッタ。死体ノ傍ニアッタハズダ」
と、言った。
男は、頭をかしげ、
「ソノ附近ハ雪ガ深ク、見掛ケナカッタ。埋モレテイルカモ知レヌ」
と、言った。
五郎治は、無言でうなずいた。ミテレの死亡した土地に行って遺体を埋葬してやりたかったが、かれには寒気をふせぐ毛皮の衣もないし、途中でミテレと同じように凍死するおそれがある。かれは、明春になってから、その地へ行こうと思った。
ミテレの死は、エヘムカ老人の口から附近一帯に小舎がけをしているツングース人たちにつたわ

った。それは、かれらに異常な反響をあたえた。
かれらは、連れ立って雪中をやってくると、
「困ッタコトダ」
と、かれに言った。
かれらは、五郎治、左兵衛、ミテレのうち二人が死亡したことを深刻に考えていた。左兵衛、ミテレが相ついで死んだが、後になって郡役所の役人が、かれらツングース人によって殺害された結果ではないかと疑うおそれがあるという。
もしも、それに反論できる証拠がなければ、ツングース人たちは殺人者として処罰されると嘆いた。かれらは、後難をおそれていた。
五郎治は、ツングース人たちの危惧も当然だと思った。
五郎治たち三人は、未知の旅人としてツングース人たちの住む地に流れてきた。そのうち左兵衛とミテレが、わずか半月ほどの間に相ついで死亡したことは異常と言える。役人は、ツングース人たちの恐れている通り、かれらが二人を殺害したと思うかも知れない。五郎治が他の土地に流れて行ってしまえば、二人の死が、病死と凍死であることを立証できる者はいなくなるのだ。
ツングース人たちは、連日五郎治のもとにやってきては、
「後難ガ振リカカラヌヨウニシテ欲シイ」
と、懇願した。
五郎治は、思案の末、紙にロシア語で、左兵衛は病死、ミテレは凍死したと書き、日付けの横に自分の偽名である良左衛門という名を記した。名を書けば役人に自分がここにいることを知らせる

ようなものだと思ったが、このような地まで役人がくることはあるまいとたかをくくったのだ。

文化八年（一八一一）が、明けた。

かれは、エヘムカ老人の家に寄宿していたが、一月下旬、エヘムカは、道具類を雪橇にのせると、行く先も告げずに家を出て行った。それは、かれだけではなくツングース人たちの集団移動らしく、近くに点在する家々は、すべて空家になった。

かれは、一人きりになった。

あたり一帯は、氷と雪におおわれ、食料を得ることもできない。エヘムカ老人の残していった干魚をかじって過していたが、それも尽きてしまった。まだ雪は深く、凍死の危険は十分にあったが、その家にとどまることは餓死に通じるので、ミテレが行こうと誘ったギリヤーク人たちの住む家に行くことを決意した。

かれが、天候の恢復を待っていると、家に四人のツングース人が訪れてきた。それは、アリチャオレという男の家族で、妻アガヒヤ、幼い娘エルコケ、息子ヌシュグドを伴っていた。

かれらは、山岳地帯に住んでいたが、食料の魚が絶えたので、やむなくツングース人たちの住むツグル村におりてきた。そして、ツングース人の集団移動についてゆこうとしたが、食料が皆無なので置去りにされたという。

五郎治は、かれらが自分と全く同じ境遇にあることを知り、一緒にギリヤーク人たちの家に行こうと誘った。

アリチャオレは、かれの申出を喜んだ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

アリチャオレは、
「私ニハ、鉄砲ガアル。コレヲゲレヤカ（ギリヤーク人）ニ質入レシ、春マデ食ベサセテモラオウ」
と、言った。
かれらは、二艘の橇を持っていた。一艘の橇にアリチャオレと娘、他の橇に妻と息子が乗り、それを犬がひいていた。それらの橇は小さく、犬も八頭しかいないので、五郎治は乗るわけにゆかなかった。
かれは、橇の後から細長いかんじき（スキー）をはいて歩いて行った。かんじきをはくのになれてきてはいたが、かれは遅れがちだった。
かれは、雪原を必死になって進んだ。食物を口にしていないので体がだるく、足が、麻痺したように感覚を失っている。寒気がきびしく、露出した顔面の皮膚に強い痛みが起っていた。
かれは、ミテレのように凍死することをおそれた。幸い吹雪は襲ってこなかったが、風はかなり強く粉雪を舞い上らせ、あたりを白く煙らせていた。
かれは、アリチャオレ一家の乗った橇の跡をたどってよろめくように歩いていったが、橇の跡は風に吹き消されてしばしば方向を見失った。しかし、アリチャオレ夫婦は、その都度橇をとめて五郎治を待ってくれていた。五郎治が近づくと、橇は再び動き出す。二人の幼い子供は、毛皮につつまれて身をうずくまらせていた。
日没が、やってきた。
五郎治は、遂に橇を見失ってしまった。かれは、磁石を出し、方向をたしかめておぼつかない足

どりで歩いていった。
野宿以外に方法はない、と、かれは思った。あてもなく闇の中を歩き廻れば、体力を消耗し、凍死のおそれもある。かれは、雪をすくって口に入れ、咽喉をうるおすと、ゆるい傾斜をくだっていった。
かれは、足をとめた。野宿をするには、雪に深い穴を掘らねばならなかったが、かれには体力がなかった。かれは、崩れるように膝をついた。死が迫っていることを感じた。
かれのかすんだ眼が、大きくひらいた。右前方の大樹の下に、火がみえる。その傍に、人影がちらついていた。
かれは、立上るとその火の方向に歩いた。火の周囲には、二人の大人と二人の子供が坐っていた。それは、アリチャオレの一家で、アリチャオレが、五郎治の姿に気づいて立上り、かれの体を支えた。そこには雪穴が掘られ、毛皮が敷かれていた。
アリチャオレは、
「貴方ガ遅クナルト思イ、ココデ火ヲ焚キ待ッテイタ。早ク火ニ当ッテ下サイ」
と、焚火の傍に腰を下ろさせた。
五郎治は、胸が熱くなった。ロシアに来てからさまざまな人間にふれてきたが、温く遇されたことは皆無に近かった。アリチャオレ一家は、食物もなく餓死の予感におびえている。が、アリチャオレ夫婦は、微笑を顔にうかべて五郎治を温くいたわってくれる。かれは、飢えと寒気にうちひしがれていただけに夫婦の温情が嬉しかった。
食べる物はなく、胃が痛かった。が、かれは、子供の手前泣き言は口にできぬと思った。

アリチャオレの娘は七、八歳であり、息子は四、五歳であった。食物を口にできぬかれらが身もだえし、泣きわめいても無理はなかった。しかし、かれらは表情も変えず、それが運命と諦めているのか苛立った眼もしていない。二人は、しばしば唇をなめ、咽喉を動かしている。その動作はかれらが健気にも全身で飢えとたたかっていることをしめしていた。

五郎治は、アリチャオレ一家と雪穴で一夜をすごし、夜明けとともに出発した。

空腹感はうすれ、意識がかすんでいた。犬たちの足もよろめきがちで、苦しそうに橇をひいてゆく。その後から、五郎治は、かんじきをはいてついていった。

ようやく前方にギリヤーク人たちの住む家がみえてきた。すでに橇は家の前につき、アリチャオレたちが、五郎治の近づくのを待っていた。

ギリヤーク人の家の主人はトリコノと言い、家族は男三人、女五人で、それ以外に寄食人が六人もいた。それらの寄食人は一様に痩せこけ、放心したような眼をして床に坐っていた。

トリコノが、険しい表情をして家の中から出てきた。アリチャオレ一家と五郎治を受入れる気持はないようだった。トリコノは、なにかギリヤークの言葉で言うと、他の場所へ行けというように手で追い払う仕種をした。

アリチャオレが、荷物の中から銃をとり出し、しゃべりはじめた。トリコノが、銃を手にした。その眼が光り、しばらく銃を見つめていたが、うなずくと家に入れという動作をしめした。

五郎治は、安堵し、アリチャオレの子供たちを橇からおろすと、家の中に入った。

トリコノは、五郎治とアリチャオレ夫婦にそれぞれ一日三枚、二人の子供に二枚のかれいの干物をあたえると約束してくれた。かれいといっても、それは九センチほどの小魚であったが、五郎治

たちには、久しぶりに口にできる貴重な食物であった。
五郎治は、その日、一日中床の隅に毛皮を敷いて寝ころがっていた。
かれは、翌日、ツングース人に教えられて海岸に出掛けて行った。そこには、ミテレを埋葬した雪穴があった。かれは、ミテレが携行した銃を探した。雪の中に埋もれているはずであったが、附近一帯の雪をかいても、銃は見当らない。持っていった弾丸も火打ち道具もなかった。
かれは、失望した。銃がなければ、アザラシも獣類も入手できない。おそらく銃は、通りすがりの者が持ち去ったにちがいなかった。
海岸に埋葬されたミテレの遺体は、海面をとざす氷がとけて波が打寄せる頃になれば、海に流れ出てしまうだろう。五郎治は、哀れに思い、雪をかいて土中に浅く埋められたミテレの遺体を掘り出した。
遺体は凍りつき、開いた眼も白くなっている。その体は重く、橇の上にのせるのにかなりの労力を要した。
かれは、橇をひいてゆるやかな傾斜をのぼり、海岸から遠くはなれた場所まではこんだ。そして、雪をかき、露出した土に穴を掘ってミテレの大きな体を落した。妻子もなく生れつき放浪癖のあったミテレらしい死のように思えた。
かれは、土をかぶせ、雪穴を埋めた。そして、獣類に遺体を食い荒らされぬように樹木の枝をかぶせると、橇をひいてギリヤーク人の家の方へもどっていった。
五郎治は、ギリヤーク人たちが自分に好意をいだいていないことに気づいていた。
かれは、ツングース人のアリチャオレ一家とギリヤーク人の家にやってきた。そして、アリチャ

オレが銃を質入れしたことによってツングース人たちは、食物をあたえてくれている。が、ギリヤーク人たちは、ただ一人容貌もちがい、妙な髪型をした五郎治を不可解な流れ者として警戒しているらしかった。

朝、かれらは、その日の食料としてかれいの干物を三枚渡してくれるが、五郎治にあたえる時にはあきらかにためらう風がみられた。かれらは、得体の知れぬ五郎治に食物をあたえたくはないのだ。

家の主人であるギリヤーク人のトリコノは、五郎治にうさん臭そうな眼を向けるとギリヤーク語で質問した。アリチャオレがそれを通訳し、

「オ前ハ、以前私ノ家ニ来タ時、センタリン諸島デ破船シ、ココマデ来タト言ッタガ、何ノ目的デ、センタリン諸島ニ行ッタノカ」

と、言った。

五郎治は、

「私ハ、満州ノ者ダ。満州ノ王様カラ、センタリン諸島ニゼヤウオロト言ウ鬼ガイテ人ヲ食イ殺シテイル由ダガ、ソレヲ見届ケテ参レト言ウ命令ヲ受ケ、センタリン諸島ニ行ッタノダ」

と、答えた。

アリチャオレの通訳で、五郎治とトリコノの間で問答が交され、他のギリヤーク人や同宿のツングース人たちも、五郎治の答を険しい表情できいていた。

「センタリン諸島ニ行ッタ後ハ、ドウシタ？」

と、トリコノ。

「氷デ船ヲ砕カレ、食料ソノ他ハ海中ニ沈ミ、失ッタ。ソコデ大センタリン島ニ上陸、ゼヤウオロガ居タラ退治ショウト思イ、仲間ト共ニ歩キ廻ッタ」

と、五郎治。

「鬼ハ、イタカ？」

「ソレガ見当ラナカッタ。仕方ナク食物ヲ探シテココマデ来タ」

「イツマデ、ココニ居ルツモリカ？」

「明春マデ世話ニナリタイ。ソノ後満州へ帰ル」

五郎治は、懇願する仕種をしてみせた。

トリコノたちは、顔を見合せた。沈黙が、かれらの間にひろがった。

五郎治は、自分の口にした嘘がかれらに信じられていないらしいことに気づいた。日本人であることが知れれば、逃亡者として役人に密告される。かれは、ギリヤーク人たちをあざむいて、明春までこの家にとどまり、満州へ赴きたかった。が、かれが偽りを口にしていることが知れれば、かれはギリヤーク人たちに追い立てられてしまうだろう。

もしも、そのような事態になれば、五郎治は飢えと寒気におそわれ、死亡することは確実だった。

「本当ニ、オ前ハ満州ノ者カ？」

トリコノが、アリチャオレを通じて疑わしそうにきいた。

五郎治は、そうだと答えた。

「ソレデハ、満州ノ歌ヲウタッテミロ」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo